傭兵団へようこそ

築

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傭兵団へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ２８５７Ｚ

【作者名】
築

【あらすじ】
小学一年生の少女、神代月子（かみしろつきこ）はその日いつも通りに家を出た。しかし、登校途中に寄り道した川で溺れ、彼女は異世界に流される。そして流れ着いた異界、月子はとある傭兵団に拾われ、彼らの一員として乱世を生き抜いていく。※処女作ですので至らない部分がありましたらご指摘いただけると嬉しいです。

序「月子という少女」（前書き）

序章になります。多少きつい表現ありです。

序「月子という少女」

「いってきまーす。」
今日も彼女、神代月子（かみしろつきこ）はそう母に告げて玄関のドアを開けた。

時計の針は七時を指している。登校にはまだ早いこの時間に家を出るのが彼女の常であった。そうして家から小学校まで15分の道程をたっぷり道草して、登校時刻ぎりぎりに学校に着くのがこの少女の一日の始まりである。もっとも昨日は道草が過ぎて朝のホームルームに遅刻してしまったのだが。せっかく近所の小川にカエルの卵が産み付けられているのを見つけたのだから夢中になっても仕方ない、というのが月子の言い分だった。新任の担当教諭からは大目玉である。

そもそも、と月子は思う。学校は退屈すぎるのだ。外にはいろいろと面白いものがあるのに学校で机に張り付いてお勉強、なんてもったいない。足し算や引き算よりも、カエルの卵のほうがよっぽど面白いのに。

しかし世間一般では、小学生にはおとなしく席に着いて先生のお話を聞くことが求められているらしい。それが出来ない月子は劣等生、というわけだ。そんな『できない子』である月子をなんとかしなければ！と担任は燃えているらしく家に電話が掛かってきたのも一度や二度ではない。

「…ガッコウ、いやだな。」

小石を足でドリブルしながらぽつりと呟いてみる。
クラスメイトは月子のことを先生に逆らうヘンな子という目で見ているし、元々あまりおしゃべりでは無い月子には小学校に入っ

てもう三ヶ月だというのに友達がいなかった。なので学校では先生の睨み付けるような視線を一人で耐えなければならない。
頭の中をぐるぐると嫌な気持ちが渦巻いている。月子はぶんぶんと頭を振ってそれを振り払った。
気を取り直して、今朝の目的はカエルの卵である。昨日は用意が無かったので持って帰れなかったが、今日はちゃんとプラスチック製の水槽を持ってきていた。嫌なことは忘れて意気揚々と、昨日卵をみつけた場所に向かう。

「わっ…、生まれてる。」

小川の中の流れの淀んだ場所。昨日カエルの卵を見つけたところを覗き込むと小さなオタマジャクシが群れをなしてちょろちょろと泳いでいた。月子は思わず瞳を輝かせる。
今日の獲物は変更。泳ぎ回っているので卵より難しいだろうが、沢山いるから川に入れば手でもすくえそうである。幸い今日はサンダルだからそのまま川に入れる。月子は川辺にランドセルを放り出して、オタマジャクシを驚かさないようにそっと水面に足を着けた。アスファルトで熱された足に冷たい川の水が心地良い。足の指でグーパーを作って川底のむにゅむにゅした感触をしばし楽しんでから、月子は標的に取り掛かった。

「うむ、たいりょう…」

小さな立方体（すいそう）の中、オタマジャクシの群れが少なくなった酸素を求めてうぞうぞと泳いでいる。都会の集合住宅もびっくりの超過密状態だ。うぞうぞとうごめく黒い水槽を覗き込んで一人恍惚の笑みを浮かべる幼女。月子である。端から見ると心配になる情景が出来上がっていた。んふふふふふ、と怪しい笑いを湛えつつ、戦利品をもっとよく見てやろうと水槽を光にかざすように高く持ち上げる。

その時である。

「ひゃっ！」

――川底の石に足を取られた。

空中に投げ出される水槽。

太陽。

青い空が見えて。

体が水面に強く叩きつけられるのを感じた。

衝撃で底に溜まっていた泥が舞い上げられる。

鼻孔に、驚いたままの形に開いた口にも容赦なく水が浸入してくる。

肺が、脳が空気を求めている。

巻き上げられた泥が煙幕となり月子の視界を阻んで、上下の感覚をも失わせている。

月子の足が着くほど、浅い川の筈なのに、もがいても、もがいても、川面に届かない。

―ふと、学校に行かなきゃ、と場違いなことを思い出した。

そういえば今何時だっけ、と思って。

「神代さん、あなたは落ち着きがなさすぎます。」と先生のお決まりの叱り文句が思い浮かんだ。

それからお父さんの月子を撫でる大きな手を。

最後に毎朝聞いているお母さんの「いってらっしゃい」を思い出して。

――月子は最期の意識を、手放した。

川で溺れた児童の捜索は町を挙げて行われた。しかし程なくして2？下流で児童の履いていたサンダルの片方が見つかり、生存は絶望的と判断された。警察と消防による捜索が打ち切られた後も、しばらくは下流の町の駅前でチラシを配る両親の姿が見られたが、一年経ち、二年が過ぎた頃にはそれも無くなった。

享年七歳。

それが神代月子についての、この世界での最後の記録である。

一話「グレイグ傭兵騎士団」

大陸を横断する霧吹連山以南に広がる大扇状地帯。その中央、西をイスカーン帝国、東をヴァルトリア神国という二国に挟まれた地に、ここイルミナ王国は位置している。その東の国境沿い、即ちイルミナと隣国ヴァルトリアを隔てる大河カムーン川のほとりに、彼らグレイグ傭兵騎士団は野営地を設営していた。

現在イルミナとヴァルトリアは小規模な小競り合いが続く紛争状態となっている。南北に長い国境線の守備は王国正規兵だけでは手が足らず、優先度の低い拠点防衛に彼らのような体よく使える傭兵団が駆り出されているというわけである。

「とは言え、なぁ。」

川縁に腰掛け安い紙巻煙草をふかしながら、団長ブラン・グレイグは薄く朝もや掛かった対岸をぼんやりと見遣った。

手が足らないのはあちらも同じ。そしてこういった拠点に傭兵が宛がわれるのもまた同様である。こちらもあちらも金のため、使命感も名誉欲も無しと来ると必然的に戦闘行為が行われないという状況となる。

その結果、戦争中にも関わらず両軍の間にはなんとも言えないのほほんと気の抜けた空気が漂っていた。半日ほど北上したカムーン大橋の辺りでは両国本隊同士による一触即発のある睨み合いが続いているらしいが、今のところこちらに飛び火してくる気配は無さそうだ。

「団長、お早う御座います。良い朝ですねぇ。」

「…イールか。おはようさん。あと気配を殺して近づくのは止め

ろな。」

突然背後に現れた目の細い青年に嘆息しつつ目をやると、細い眼を更に細くして笑みを返してくる。

「嗚呼なんと嘆かわしい。天下のブラン・グレイグともあろうお方が私如（ワタクシ）きの気配に気づかないとは。団長ももうお年なのですかねぇ。」

「バカいえ。俺はまだ四十にもなってねぇぞ。老け込むにゃ早ぇよ。それにな、この温い戦況と来たもんだ。俺じゃなくったって気が抜けらぁ。」

「うふふ、冗談ですよ。仮に私が殺気を出して近寄れば貴方は仮令就寝中でも気が付かれるでしょうからねぇ。」

「冗談じゃねぇぞ。目が覚めたら手前ぇのツラなんてのは勘弁被るぜ。」

嫌そうに会話を打ち切って再び青年―イールを見る。顔には薄い笑みが貼りついたままだ。何がそんなに嬉しいのかと思うが、生憎彼は大抵常にこんな表情である。

イールゾァ・キルヒシュタン、通称イール。王立魔術院を追い出され傭兵稼業に身をやつす不良魔術師にしてグレイグ傭兵団の主砲でもある。

「へぇ、気が合いますねえ。私も髭面の強面中年男性と御同床する趣味は無いのですよ。」

「…なんの話だ。ん、おいゾッドが来たな。飯の時間だ。」

「おやぁ、本当だ。彼はこの距離からでもよく分かりますねぇ。」

集会所兼食堂のテントから筋骨隆々の巨漢がこちらに歩いているのが見える。フルネームでゾッド、かつて西隣の帝国と戦争があった折にブランの傭兵団に加わった元剣闘士奴隷である。長身のブランと比しても更に頭一つ分は高く、横幅も二周りは大きい。その姿はまるで歩く巖のようであり、成程、遠くからでも一目で判別できる。

「…団長、カムリが、呼んでる。…飯だ。」

近くまで来たゾッドが訥々と、見た目に依らず優しい声色で告げる。その声色通りに普段は心優しい彼だが、戦闘に於いてはその外見のままに鬼神の如き働きを見せる。

ブランはかなり短くなってしまっていた煙草を親指でもみ消すと、一息入れて立ち上がった。イール、ゾッドというむさい取り合わせでのろくさと食卓の待つテントに向かう。

「おい、今日の担当はカムリか？まさかあいつ一人に任せたわけじゃぁねぇよな。」

「…大丈夫だ。おれも、手伝った。味付けは、おれだし、…変なものも、入って、ない。」

「お前が監督したなら問題ねぇか。もう得体の知れない薬草やら隠れてない隠し味やらは御免だからな。」

「彼女の可憐な手からは世にもおぞましい劇物が生み出されますからねぇ。彼女の神も料理について啓示を下さる事は無いのですねぇ。んっふふ。」

本人の居ないところで散々言われている少女、カムリ・イミナ・リエッタはイルミナ国教で祀られる十二神の一、賢羊のメイサーラに仕える巫女である。彼の宗教の教えに、『他者に奉仕せよ』というものがあり、神に仕える者は一定期間を神殿で修行した後に巷間に出て、衆生に奉仕する義務がある。出仕先は学校、商店、治療院など多岐に渡るが、軍隊も選択肢の一つではある。

王国正規軍はもちろん、王国内を拠点とするのであれば傭兵団に出仕することも出来る。しかし、汚れ仕事が多い軍隊は人気の無い出仕先だった。移動が多く、悪党紛いの団員が居ることも儘ある傭兵団では尚更だ。それでも規模の大きい傭兵団では一人二人は抱えていたりするが、ここのような二十人弱の小所帯に好き好んで出仕するのはかなり珍しい。変人と言って良いだろう。

ともあれそれがグレイグ傭兵団の従軍神使、カムリである。平時は女手の少ない団内の雑事担当、戦時には神の力を借りた癒しの業で団員の治療に当たってくれる。料理以外では非の打ち所が無い人材と言えるだろう。料理以外では。

「おや、噂をすればですねぇ。」

なかなか来ない三人に痺れを切らしたのか、白い装束を纏った少女が栗色の巻き毛を跳ねさせつつテントから出て彼らを出迎えた。

「なんの話ですか？それよりっ、早く来ないと私とゾッドさんの作った美味しい料理が冷めちゃいますよぅ。」

「御機嫌ようカムリ嬢。耳が良いのですねぇ。なに、他愛ない噂話ですよ。」

「ああ、他愛ない劇薬の噂話だな。それと作ったのは主にゾッドだろうが。」

「んむー。ブランさんは意地悪です。わたしだってちゃんと手伝ったんですからねっ。盛り付けとか配膳とか食材を洗ったりとか。ね、ゾッドさん。」

「…ああ、カムリは、がんばった。えらい、ぞ。」

「えへー。あっ、ホラホラさっさと入って席に着かないとアウレリアさんがご立腹ですよぉ。」

「なにっ、そいつはまずいぞ。あいつは俺でも怖いからな。」

半分本気の軽口を叩きつつ、風防を捲くり団員達の待つテントに入る。団長ブラン・グレイグ以下総勢十七人、このさほど大きいとは言えないテントに収まってしまう人数のそれが、少数精鋭を詠うグレイグ傭兵騎士団のメンバーである。ブランは居並ぶ面々を満足そうに見渡す。誰もが気心の知れた彼の頼れる仲間にして養っていくべき家族だった。

「おはよう、野郎ども。遅れて悪ぃな。っと、んん?」

「おはようグレイグ。遅刻を反省しているのなら毎日繰り返さないようにしなさい。団長がそんなことでは隊規に関わります。さらに、この場には女性も在席しているので野郎どもという挨拶は不適切です。それと、どうかしましたか。怪訝そうな顔をしていますが。

」

「いや、よく見たらキリの野郎がいねえじゃねえか。俺を勘定に入れて十六人しかいねえぞ。」

「わざわざ報告せずとも承知しています。彼なら対岸の偵察任務に就いて貰っています。こうして我々が食事を取っている時に敵方が攻めてくることもあるのですよ。」

ハァ、と小さく息をつく銀髪の麗人。グレイグ傭兵騎士団副長、氷の副長の異名をとるアウレリア・ディ・シュヴァルツシルトである。ブランとは傭兵団立ち上げ以前からの長い付き合いになる。

事務仕事が壊滅的な団長に代わって、経理、物品管理、外部との折衝、戦時の参謀など多岐に渡る業務をこなしている。団の屋台骨を支えているのはこの人である、とは団員全員の意見の合致が見られるところであった。ちなみに団長はどっしり構えてんのが仕事なんだ、とは彼自身の談。

「おお、そうかご苦労だな。つーとあいつの分の飯も取っておいてやんねぇとな。いや、いつもすまねぇなアウラ。」

「皆の前では家名或いは職名で呼びなさい、とこれも毎日言っていますね？グレイグ。それと名前を省略しないこと。」

「んだよ、お前の名前は舌噛みそうになんだよ。なっ、カムリちょっと言ってみろよ。」

とりあえず横で聞いているカムリに話を振ってみるブラン。他の連中はいつもの事と、トップ二人のやり取りを無視して既に朝餉にありついていた。

「えあっ。ななんでわたしに振るんですか。え、えーとアウレリャ・ディ・しゅぶっ。…。」

団長の急な無茶振りに応え、期待通りの結果を生み出すカムリであった。神の僕は従順たれ、という教えを忠実に守っていると言えよう。隣に座っていたゾッドがお前は良く頑張ったとでもいう様にカムリの肩を叩いている。

「リエッタ、その命令には応えなくて良いのですよ。グレイグ、貴方は緊張感が無さ過ぎます。未だ実際に矛を交えてはいないとは言え我々は名目上交戦状態なのですから。敵方には船の用意もあります。油断は禁物ですよ。」

「つってもよぉ、敵さんも俺らと同じ雇われだぜ。わざわざ危険を冒してえっちらおっちら船漕いでくるとは思えんがねぇ。」

「…確かに。我々は、防衛。有利だ。」

ブランの意見にゾッドも賛成の意を表す。

「…まあその、確かにその通りではあるのですが。」

常ならばアウレリア側に回ることが多いゾッドが、今回はブランに賛同したためにアウレリアも珍しく言い淀んだ。団員中最も真面目な部類に入る二人でもそうならざるを得ないほど、今回の戦場が日和ったものであるという事だろう。

「しかしですねグレイグ。団長という役職にはたとえ平時であっても職務があるものなのですよ。今日はせめて帳簿の読み方程度は

覚えて貰います。」

「うげ、勘弁してくれよ。俺はお前さんと違って学がねぇから無理だっつーに。」

「いーえ。貴方なら出来ます。貴方はやらないだけです。さぁこちらへ。」

その時である。ぱんぱん、と掌を打つ音が聞こえ、団長、副長のやり取りを生暖かく見守っていた団員達の目がそちらに向かう。音の主はイールだ。

「んふ。御両名ともそろそろ止めておいた方が宜しいのじゃありませんか？御二人の夫婦漫才で、緩んだ空気が更に緩みきっちゃってますからねぇ。ふふふ、いえ私にとってはあなた方の仲睦まじい様子を眺めるのも一興では有るのですけれどもねぇ。」

イールの言にアウレリアの白い肌がみるみる朱に染まっていく。

「ばっ、なっなにをいっているのですかあなたはキルヒシュタン！わっ、私とブランがそそそそんな！めおとっ、めおっ。」

「おんやぁ、どうかされましたか？口調が崩れておいでですよ副長閣下。」

「うふふふふ、まあそんな事よりも、今日々の退屈を如何様に解消すべきでしょうかねぇ。ねぇ皆さん。例えば偵察に出たキリさんが何か途轍も無く面白い厄介ごとを発見して帰って来るとか、ねぇ。」

それきり黙って、テントの入り口をじっと眇めるイール。この魔術師の奇妙な言動は今に始まったことでは無いが、その魔術師としての実力を知っているだけに、団員達も思わずそちらを注視してしまう。

しばしの沈黙。その静寂を破ったのは無理矢理作った笑みを浮かべたカムリだった。

「…も、もうやだなぁイールさんってば。縁起でもないこと言わないでくださいよぉ。ねっ、ブランさん。」

「おーいアウラー。もどってこーい。…ん？おおそうだな。不吉なこと言うもんじゃねぇぞイール。平和が一番！ってな。だろう野郎ども。」

そうおどけて団員達を見返すブラン、片手に持った麦酒のグラスを掲げて乾杯の真似事をしてみせる。その背中に突如、年若い少年の悲鳴に似た声が掛かった。

「――――団長！大変だ！河から女の子が流れてきた！！！」

二話「流れ着いた少女」

「あーあ、退屈だぜ。この任務やるんじゃなかったな。」

そう、独りごちて少年、キリは河面に石を投げ込む。

キリは今年で十二になる。もちろん傭兵団では最年少だ。お陰で誰も彼もがキリを何も出来ないガキ扱いする。だから副長から敵兵の偵察を頼まれたときは嬉しかった。簡単な任務です、と事務的な口調で念を押されはしたが、それでも傭兵になってから初めて任された『らしい』仕事だ。今まで仕事と言えば、カムリの手伝いで汗臭い衣類を洗濯したり、他の団員に混じって炊事当番をしたりと言った裏方仕事ばかりだった。

キリも男だ。せっかく傭兵になったのだから矢面に立つような仕事がしたいと常思っていた。そんなこんなで冒険心を膨らませて受けたこの任務は、その実河川の観察と言い換えてしまっても良いような代物だった。ただでさえカムーン川の河幅は広く、昼間でも対岸は霞んで見える。さらに今朝は川霧が掛かっていて全体の半分も見渡せない。対岸は真っ白で何も見えませんでした、と報告したら副長はどんな顔をするだろうか。案外、事務的な顔で、では川霧の様子を報告なさいとでも言うかもしれない。

はぁ〜、と重く溜息をついて今日何個目かの石を投げ込む。石はチョンチョンチョン、とリズミカルに何度か跳ねて水面に吸い込まれていった。

「んっ？」

石が消えた辺りをよく見ると先ほどより霧が薄くなっているのが分かった。もうしばらくすれば対岸の様子も伺えるようになるかもしれない。これでも目は悪くない。戦術指南のガライ爺にもそう言って褒められた。キリは河岸のぎりぎりに立ち、よく目を凝らして対岸の様子をじっと見つめた。

「うおお！よっしゃだんだん見えてくるぞ。――――人影発見！なんか白いのを抱えてんな…。」

しばらく見つめていると人影は抱えていた白い物体を大きく広げ水平に渡した木の棒にそれを引っ掛けて……。

そこには敵兵がのどかに屋外でシーツを広げる情景が繰り広げられていた。

「うおいっ！なに暢気にシーツ干してんだよ！今日は洗濯物が良く渇くわ～ってか。めでてーなおい！戦争なめてんのか！」

「ちきしょー。これじゃうちといい勝負のだらけっぷりじゃねえか。…ん？なんだありゃ。」

キリが立っている川辺からそう遠くないところに、黒く広がった水草のようなものが漂っている。水面の反射で見にくいがその下には白い布のようなもの。

「――――！あれは、人だ！」

確認するや否や、キリはすぐさま河に飛び込んだ。ただの水死体かも知れないなんて考えもしなかった。

この辺りは土地が平らで河の流れは緩やかだ。真っ直ぐ泳げば追いつける。着衣のまま飛び込んだせいで、衣服が水を吸い体にまとわりつく。春先とはいえ、早朝の河の水は未だ冷たかった。冷たい水がキリの手足から急速に体温を奪って行く。キリは感覚の徐々に失われてきた重い腕で、それでも水を掻き分け進む。そしてやがて、キリの腕が溺れている人物の腕を掴んだ。

思っていたよりも短い時間でたどり着けた。溺れているのが存外小さい人間だったせいで距離の目測を誤っていたのだろう。溺れていたのは女の子だった。それもキリより随分小さい。キリの腕の中でぐったりとしていて顔色も悪いが、伝わってくるわずかな体温がそれが死体ではないことを教えてくれた。

小さい少女を抱えて元の岸までたどり着くのは苦では無かった。岸に上がってからも息つく暇など無い。急いで少女を背中に負ぶった。背中から感じる少女の鼓動は弱々しく、早く処置しなければ命に関わるだろう。キリは集会所のテントへと一目散に駆けた。

〜〜〜

「――――団長！大変だ！河から女の子が流れてきた！！！」

集会所の風防を跳ね除けて、最初にキリの目に入ったのは見慣れた団長の背中で、彼は思わずそう叫んだ。

ブランが飲んでいた麦酒を吹き出しむせるのと、なぜか入り口を向いていた団員達の目が一様に丸くなるのは同時だった。いや、イールを除いて。彼はいつも通りのニヤケ面だ。

刹那の硬直の後、最初に動き出したのは氷の副長、アウレリアだった。

「キリ、任務ご苦労。事情は後で聞きます。その少女をこちらの食卓の上へ。」

ブランは未だむせている。どうやら気管に入ったらしい。
アウレリアは卓上に寝かされた少女を慣れた手つきで触診し、鼓動、脈拍、体温、呼吸を手早く確認した。

「シーシアス、炊事場でお湯の準備を。イバラードは宿舎から出来るだけ清潔な毛布とシーツを。ボレルは備品庫へ。新しい衣服と布を持ってきなさい。皆大至急です。」

呼ばれた三人は各々短く返事をすると、テントから出て行った。

団員達に指示を送ると、今度は少女の人工呼吸に取り掛かる。鼓動はあるとはいえ、まだ幼い少女だ。予断を許さない状況である。なにをおいてもまずは肺の中の水を吐き出させる事が先決だ。弱った鼓動に刺激を与えつつ、少女の口に呼気を吹き込んでいく。少女の弱い肋骨を折らないように力を加減しつつ慎重にこれを繰り返す。アウレリアの白い額には薄く汗が浮かんで来ていた。状況を見つめる団員達の間にも重苦しい空気が流れる。

幾度繰り返した頃だろうか、ピクリともしていなかった少女が大きく体を痙攣させて水を吐き出した。ぜぇぜぇと荒くはあるが、自発的に呼吸している。意識はまだ取り戻さないようだが、一安心といったところか。固唾を飲んで見守っていた周囲の面々も安堵の表情を浮かべている。

「―良かったぁ」

キリは肩の力の抜ける思いだった。半人前の自分でも人の命を救うという大仕事を成し遂げることが出来たと思うと、なんだか誇らしい気分で胸が詰まった。ぽんぽん、と大きな手がキリの頭を優しく叩いた。ゾッドがその優しい褐色の瞳を向けてくる。その目が良く頑張ったな、と言っているようでいつもは子ども扱いと嫌うそんな行為も気にならなかった。

「これでいいでしょう。イバラード、ボレル、戻りましたね。リエッタはその子を着替えさせて、毛布で体を温めてあげなさい。シーシアスが戻ったらお湯で絞った布で体を拭くことも忘れずに。お湯が温くなったら補充しなさい。貴女の治癒の力での治療も並行して行えばすぐ平熱にまで回復するはずです。」

「はっ、はい。がんばります！あ、でもアウレリアさんそれって全部この場所で？」

「…なにか問題でも？」

「あのぅ、だってほら女の子ですし、ここで着替えさせるのはちょっと可哀想かなーなんて…。」

「彼女は気絶しています。それに幼子ですから、男女の別は関係ないでしょう。」

「…ふぁい。」

たとえこの子がいくつであっても、女の子なら見られて恥ずかしいものだとカムリは思うのだが、そう言った機微はアウレリアには伝わらないらしい。

「…いいですね皆さん！ぜえぇぇっったい見ちゃダメですからね！」

カムリは周囲の男性陣をねめつけ、強く念を押した。

さすがに二桁にも達していないような年頃の少女に劣情を催す男性は団員にはいない。カムリの言葉に男性たちは口々に不平を吐くが、それでも素直に少女とカムリから視線を外した。

そこに不意によく通る大声が響く。他の団員と共に成り行きを見守っていたブランだった。

「あ～、どうやら落ち着いたみてぇだな。後の事はカムリに任せるとして、俺たちは俺たちで話し合う必要がある。キリが助けたガキ、そいつは誰か、いったい何処から来たのか、なぜ河に溺れていたのか。奇しくもイールの言葉通り、興味深い厄介ごとってヤツが舞い込んできたみたいだな。」

「…団長、あんたむせてただけの割りにえらそうだな。―ぶえぇっくしょ！」

「混ぜっ返すんじゃねぇよキリ。よく考えたらお前さんもびしょ濡れじゃねえか。てめぇもさっさと着替えて寝ちまえ。風邪引くぞ。」

「おい！おれにだって話し合いに参加する権利はあるだろ！おれが助けたんだぜ…ぇぇぇっくしょん！」

「あーあー言わんこっちゃねぇ。ほら行った行った。」

追い立てられしぶしぶ集会所を出て行くキリ、その背中にブラン

の声が掛かった。

「おいガキ、――よく頑張ったな。誇っていいぜ。」

キリの肩がびくんと跳ねる。表情は伺えないが耳が真っ赤になっているのが見える。

「…ガキじゃねぇっつってんだろおっさん！」

キリはそう捨て台詞を吐いて、集会所から駆け出して行った。

「さぁて、素直じゃねぇガキが行ったところで、会議を始めるとしようか。」

「グレイグ、その前にすべきことがあるでしょう。」

「なんだアウラ、帳簿なら後回しだぜ。」

アウレリアは食卓の片一方を目線で示す。少女を寝かせるスペースを空けるために寄せられた食器類が卓上に乱雑に積まれていた。

「食器の片付けです。さすがにこの状況では会議はできないでしょう。」

三話「集会所にて」

「さぁもう良いだろ。いねぇヤツもいるが会議をはじめるぞ。議題はさっき言った通りだ。」

片付いた長机の上座に陣取ったブランがそう宣言した。少女は容態が安定したので宿舎に移動させ、無理な水泳がたたって熱が出てきたキリともどもカムリとシーシアスが面倒を見ている。他に数人を皿洗いと哨戒に当たらせ、現在集会所には団長以下九人の団員が集まっていた。

「あのガキがなにもんか、だよな。上流で川遊びしてて溺れただけじゃねーんスか？」

盗賊崩れの優男、イバラードが伸ばした前髪を弄りながら口火を切った。

「今は戦争中じゃ。敵国との境になっとる河で水遊びをする子どもがいるとは思えんがの。」

団員中最年長の老兵、ガライ・マックェンがすぐさま反論を述べる。

「あらぁ、じゃあ戦闘に巻き込まれちゃったんじゃなぁい？それで誤って河に落ちたとかさぁ。」

そう応えたのはシリオ・ボレル。こんな口調だが歴とした男性である。

「それも無いだろうな。市街戦ならいざ知らず、河を挟んだ野戦で一般人の子どもが戦場に迷い込むとは思えん。」

黒髪の剣士、ヨシア・メアルークが仏頂面で異を唱える。

「そうなんだよなぁ。おいイール。お前さんの言葉通りの展開になっちまったが、こうなること分かって言ってたのか。」

弱り顔のブランが脇で薄く笑っているイールに声を掛ける。

「んふ、まさかまさか。私はただそうなれば面白いなぁと思っただけの事で御座いますよ。予言の魔法なんてものは在りませんのでねぇ。そう言った事は私よりミーム嬢の領分なのではありませんか、ねぇ？」

「にゃはー、アタシの呪術はただの技術であってそんな御伽噺みたいなモノじゃないのだよイールくん？あー、あの幼女ちゃんはなんだかここらじゃ見かけない顔立ちだったよねーぇ？かと言って、アタシんとこの部族やゾッドくんのような顔つきとも違った。」

話を振られた辺境出身の女呪術師、ミームミーム・プルソアタ＝コパが意見を述べる。

「うぬぅ、だがヴァルトリア人にも帝国人にもああいう顔立ちはおらんぞ。」

地を震わせるような低音で唸ったのはヘムオン・グレイニーである。屈強な体を縮めて思案顔だ。

「そうですね。他に考えられるのは北の霧吹連山の向こう、ある

いは海を渡った他の大陸の人間という可能性です。その場合どちらも幼い子どもが単身で超えて来られる筈は無いので、第三者が彼女を連れてきたということになります。」

「あー、アウラ。つまりあのガキは一緒にこの国へ来た家族となんらかの理由ではぐれちまったか、…それとも。」

そう言葉尻を濁したブランの発言を引き継いだのはイールだった。

「んふっふ、それとも…彼女は奴隷としてこの地へ連れてこられ、奴隷商人か主人から逃げて来たか、ですよね？」

「奴隷だとっ！？あのような年端もいかぬ少女にそのような事、許されるものでは無い！！」

イールの言葉にヘムオンが顔を真っ赤にして激昂する。直情傾向のこの男はそのような非道を何よりも嫌うのだ。

ここイルミナ王国では奴隷は公的に禁じられている。しかし西のイスカーン帝国では、周囲の小国を併合して強国となった歴史柄、最下層の階級として奴隷身分が存在する。さらに近年拡大政策に転じたヴァルトリア神国も、聖戦と称した侵略行為にかこつけて周辺国から多くの奴隷を獲得している。

「落ち着けよヘムオンさん。まだそーと決まったわけじゃ無いんスよ？」

「だがその可能性が一番高い、というのも事実だな。」

ヘムオンを宥めるイバラードを尻目に、ヨシアの冷静な言が飛ぶ。

「くそったれじゃがな。イルミナは北の国との直接的な国交は無い。険しい山脈が人の行き来を阻むからの。さらには海向こうとの交流も南方の港町に限られておる。貿易商が家族を連れて戦地にのこのこ訪れんじゃろうな。」

ガライが深く刻まれた皺を歪ませ苦々しげに呟く。

「あらー、じゃああの子ヴァルトリアから逃げてきたって事になるのかしら？帝国からは距離があるものねぇ。ちょっと、可哀想じゃなぁい。助けてあげましょうよー。」

シリオが隣に座るヨシアの肩をばんばん叩きながら盛大に身悶える。

「にゃは、幼女ちゃんは異国風の可愛い顔してたよねー。肌の張りも良い、着てる服も上等だった。ヴァルトリア高級士官付きの従軍娼婦、かもねーぇ。そういう変態がいないわけじゃ無いし、あの年頃の女の子奴隷ちゃんが戦場にいる理由、なんてね。」

そう言ってミームが偽悪的に微笑んでみせる。その笑顔はどこか攻撃的で、獰猛な猫科の野獣を思わせた。

「なにが可笑しいのだミーム！ええい団長！貴君はあの少女の処遇をどうする心算（つもり）だ！」

ヘムオンが口から唾を飛ばしながら掴みかかる勢いでブランに迫った。

「おいおいヘムオン落ち着けって。あー、そうだな。とりあえず

当面は保護してやらにゃならんな。こんな場所でほっぽりだす訳にゃあいかん。その後はまぁ追々、な。」

「グレイグ。」

「う、なにかなアウラ。」

アウレリアの呼びかけにブランの体がぎくりと跳ねる。

「貴方、あの少女を傭兵団に加えたいと思っているでしょう。」

「いや、だってな。この先面倒見てくんだから当然情も移ってくるだろうしな。一度しょった荷は最後までってな。あ、それにキリのヤツのときも似たようなもんじゃねぇか。」

「いーえ違います。彼は男性で、さらにまだ若いとは言え直に体も大人のものへと成長するでしょう。なによりもキリは自らの意思で我々と共に来ることを選択しました。あの少女はキリと比べても若すぎます。そもそも戦場に赴くのは女性の身にとっては過酷な事です。さらに、きつい事を言いますが、幼い少女を連れ歩くのは傭兵団には足枷にしかならないでしょう。」

一片の淀みもない氷の副長（アウレリア）の言葉に、団長（ブラン）がすかさず反論する。

「おいおい、じゃどうしろっつうんだ。孤児院にぶち込めとでも？戦争のせいで今じゃどこも手一杯だ。この状況で受け入れてるとこなんざ奴隷商と大して変らんと思うぜ。それにウチにはお前にカムリ、ミームにリィン、サラサ、もう五人も女がいるじゃねぇか。ほら、一人増えたところでなんの問題がある。まだちいせえガキだ。食わせてやってもそう負担にゃならんだろうさ。」

どうだ、と胸を張るブランに尚も言い募ろうとするアウレリアだったが、他の団員達がそれを遮った。

「いいじゃないのよ副長。あんまり怒ると怒り皺ができちゃうわよぉ。」

「オレも、少なくとも孤児院に入れるのは反対っスね。あんなとこじゃ健全なガキは育たねぇっスよ。」

「わしもじゃな。異国出身ではおそらく満足に言葉もしゃべれんじゃろう。劣悪な環境の孤児院で、溜まった鬱憤がどこに向くかは想像に難くないの。」

「ふん、口の聞けない異国の子ども。格好の餌食だな。…俺は騒がしくなければどうでもいい。」

「にゃははー、過酷な戦場には癒しも必要。幼女ちゃんは戦いに疲れたアタシらを癒す係りー、なんてどうだいアウレリアちゃん。」

「副長、こちらの意見はまとまったようですぞ。無論己(おれ)も団長の意見に賛成だ。」

団員たちの視線がアウレリアに集まる。

「貴方たち…。ですが…。」

言い淀むアウレリアに、横合いから声が掛かった。

「んっふふふ、副長閣下、貴女は先程仰いましたねぇ？キリさん

は自らの意思で選んだ、と。ではこうしましょうか。暫く、そうですねぇ、少なくともこの戦役が終わるまでは少女を保護する。そして、その後にあの少女が自らの意思で私達と共に居たいと願ったならば正式に団員となって頂く、というのは？」

ニヤケ面の魔術師が舞台俳優のような手振りを交えて提案する。

「よっ、どうだいアウラ。ここにゃいねぇヤツらも同意見だろうさ。お前さんも本心じゃ同じように思ってんだろ？さ、どうするよ。」

最後に皆の意見を引き取って、ブランがアウレリアにニヤっと笑い掛けた。

「…仕方ないですね。ではあの少女が自ら選択した場合に限り、団員として迎え入れるのを許可しましょう。」

「いよっし、そう来なくっちゃな！あのガキは残るって言うに決まってらぁよ。なんたってここは、俺と最高の野郎どもの、最高の傭兵団だからなぁ！」

三話「集会所にて」（後書き）

真剣に話合っているけど、実情とはまったくかけ離れているのでした、というお話。主人公の寝ている間に重要なことが決められてしまいました。どうなる月子！w

今回出なかった団員達は次話にて登場させます。

四話「そして少女は目覚める」

「んあ、ここは。…寝ちまってたか？」

キリは重い頭をぼんやりと振り、テントに設置された簡易寝台から身を起こした。

「や、おはようキリ君。ここは女性宿舎ですよ。もう体は大丈夫でありますか？」

近くに座っていた金髪にそばかすのある若い団員、シーシアスがキリが起きたのに気付き声を掛ける。

「ん、女性宿舎？なんだっておれはそんなとこに…。」

「覚えてないでありますか？自分が炊事場から戻って来る途中で集会所と宿舎の間に倒れてたから運んできたのです。女性宿舎なのはカムリさんに一緒に診てもらうためであります。」

シーシアスは誰にでもこうした馬鹿丁寧な口調で話す。とても家名の無い家の人間とは思えないが、本人はそう主張していた。

「そっか、おれ熱出したんだっけか。ありがとうシーシアス。誰と一緒に、っと、そうだあいつは！」

キリの寝起きの頭が徐々に覚醒してきて、大切な事を思い起こさせた。

「や、安心するであります。あの女の子なら君の隣に寝ているで

ありますよ。まだ目は覚まさないですが、カムリさんの治癒術のお陰で大分落ち着いてきたであります。」

言われてキリが傍らを見遣ると、そこには確かにキリが助けた少女が静かな寝息を立てて眠っていた。苦しそうな様子は無く、穏やかな顔をしている。キリがしばしその寝顔を見つめていると、入り口の風防を巻き上げ誰かが入ってきた。

「ただいまシーシアスさん。あ、キリくん起きたんですね。」

「おかえりなさいカムリさん。それに…。」

カムリを出迎えたシーシアスが、その後ろに続く二人の人物に気づいた。

「やほー！見舞いに来たよっ。キリおはよー！って言ってももう夕方だけどねー。」

「り、リィン。病人が居るんだから大声出しちゃダメだよ。」

威勢の良い大声の主は斧使いのリィン・クレッセン。その後ろでおどおどしているのが弓兵のサラサ・ハピエだ。

「や、二人もいらっしゃい。他の方たちはどうしてるでありますか？」

「団長は副長に捕まって帳簿の確認だってさー。案外二人でしっぽりしてたりしてねー。あはは。」

「わわ、やめなってリィン。」

「シリオさんとヨシアさんはマックさんラッドさんと交代で哨戒任務だそうです。マックさんたちは後でこちらに寄るって言ってました。イバラードさんとミームさんはおゆはんの準備。ヘムオンさんはお馬のお世話です。他の皆さんはいつも通りに訓練したり休憩したりですよぉ。」

シーシアスに報告しつつ、カムリは少女の寝ている寝台の前へ足を運んだ。

「うんっ、よく寝てるみたいですね。これならもう治癒は要らないかな。もういつ目を覚ましてもおかしくないと思います。」

少女の様子を見て満足げに頷く。

「そういや会議はどうなったんだ。こいつをどうするか、決まったのか？」

寝起きの体を醒ますため軽く体操をしていたキリが尋ねた。会議の前に追い出されたので気になって当然だろう。

「…ん、私たちも会議に出なかったから又聞きになっちゃうけどね…。」

「その子はあたし達の仲間になることが決定したのでした！」

「や、正確には一定期間保護した後本人が望むなら、であります。」

サラサの言葉を無理矢理引き継いだリィンに、シーシアスが素早

く訂正を加える。それを聞いたキリは思わず目を輝かせ、声を上げた。

「―へへっ、そっか。そうこなくっちゃな。じゃあそいつは、おれの弟分第一号ってわけだ。」

「女の子だから妹分、が正しいでありますよ、キリ君。」

「ふふっ、キリくん嬉しそうですねー。可愛い妹が出来てよかったね。」

年長者四人の微笑ましいものを見るような視線に気づき、キリは緩んでいた顔を慌てて引き締める。

「バッ、ちっげーよ！今までおれが一番ガキ扱いだったからな。子分としてこき使ってやるってことだよ！」

言いながら顔が熱くなっていくのがキリには分かった。まだ熱が残っているらしいとキリは思うことにした。

その時、またテントの入り口で物音がして二人の人物が入ってきた。

「よーぅ、元気そうだな少年。このマックさんが見舞いに来てやったぜ。」

「いやいや、来たのはこのラッドさんさ。感謝しろよ少年。」

「おいおい来たのは、おれとお前だぜ兄弟。」

「そうか兄弟、ならば感謝は二倍必要になるな。」

言って互いに顔を見合わせにやりと笑いあったのは、瓜二つの容姿を持つコーマックとコンラッドのエヴィン兄弟だ。一応髪型で区別を付けているがその日の気分でころころ入れ替わるので、慣れた者でも二人の判別は難しい。

「いらっしゃいお二人とも。今日は右分けがマックさん、左分けがラッドさん…ですよね？」

声を掛けたカムリが二人の顔を不安げに見比べる。

「ところがどっこい、今朝起きたときぼく達自身にも分からなくてな。」

「とりあえずじゃんけんで決めたのさ。ぼくがラッド、こいつがマックってね。」

「おっとぼくがラッド、お前がマック、だろ？」

そうやって名前を押し付けあいはじめた二人に、カムリが目を白黒させる。

「えっ、えええ。じゃあ左がマックさん右がラッドさん。いやその反対で、うーん。」

「…お、落ち着いてカムリちゃん、自分の名前が分からなくなる人なんていないから。」

必死でうなるカムリをサラサがなだめる。そこへリィンの間延び

した声が掛かった。

「あっれー、ねぇねぇその子身動きしてるよー。そろそろ起きるんじゃないかなー。」

見ると確かに、先程まで寝返りも打たずに寝入っていた少女が、微かな声をあげて寝台の中でもぞもぞ動いている。

最初に動いたのはキリで、テント内の団員達も次々と彼に折り重なるようにして少女の顔を覗き込んだ。

「あっ、おいコラお前ら。重てーよ！」

「わぁ、この子はどんな子なんでしょうね。ふふふっ。」

「ひゃんっ、し、シーシアスくん手が…。」

「あははー、シーシアスがすけべだー。」

「ちちちがうであります。これは不可抗力であります！」

「おい賭けようぜ兄弟。彼女の瞳は青色とみた。」

「違うね兄弟。きっと緑色さ。」

そして彼らが見守るなか、少女はゆっくりとその目蓋を上げた。

――――これが少女の物語の始まり。もとの世界の誰も知らない、小さな傭兵団にやってきた小さな少女の長い長い物語。

「わっ、わっ起きましたよ！」

「…黒い瞳。すごい。」

「キレイだねー。」

「とっ、とりあえず何か言わなきゃであります。」

「そんなの決まってるぜシーシアス。」

「ああ決まってるな。言ってやろうぜキリ。」

「へっ、分かってんよ！」

そして彼らはそれを告げた。新入りが入ったときに決まって言う、芸も飾り気もないその言葉を。

『グレイグ傭兵団へようこそ！』

四話「そして少女は目覚める」（後書き）

これでやっと傭兵団全員が出せました。主人公含め十八名、いずれ全員集合を書かなければならないと思うと正直気が滅入ｒ
力量不足の自分ですが完結まで頑張ろうと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

五話「異界の迷子」（前書き）

今回は主人公視点の話になります。

五話「異界の迷子」

自分はどうなったのだろう、と月子は考えた。小川で溺れたところまでは覚えている。ここは何処だろう、月子の見慣れた天井では無かった。薄暗い天井をぼんやりとした光源が照らしている。

周囲の様子をもっとよく見ようと体を起こそうとするが、なぜか体が重くて起き上がる事ができない。月子は体の上に被さっていたなにかを撥ね退ける。幾重にも重なった古い毛布だった。いつのまにか着ていた、月子の物では無いぶかぶかの白い肌着と寝間着が、汗を吸ってじっとりと湿っている。

何か騒がしいと思って、月子は焦点の合わない瞳で辺りを見渡した。薄明かりに照らされた狭いテントの中、にぎやかな色彩が月子の周囲を囲んでいる。月子はそれがなんだか分からなくて、眠たい眼をこすりもう一度よく見てみる。

色彩の正体は月子の見慣れない人たちだった。一、二、三、四、五、六、七。見たことの無い色とりどりの髪の人々が、楽しそうな、嬉しそうな目で月子を見ている。彼らは月子に分からない言葉で、口々に何事か話しかけて来ているようだ。

ここは外国なのかな、と月子は思った。川に溺れて外国まで流されてしまったのかも知れない、とも。

月子の目の前で緑色が跳ねている。一番近くでまじまじと月子を見つめている年上の男の子のつんつんした髪の毛だった。それはいつも駆け回っている家の近くの原っぱを月子に思い出させる。

月子は綺麗なそれに思わず手を伸ばし小さな掌でぽんと触った。途端に男の子は真っ赤な顔をしてはじかれたように飛びのく。思ったとおり、春の草原みたいに暖かくて気持ちよかったのに、それが

遠くへ行ってしまって月子は残念だった。

男の子の後ろにも色んな顔が見える。男の子の様子をにやにや見つめている橙色の髪のそっくりな男の人が二人、快活な笑い声をあげているのは赤い髪の女の人だ。それをおろおろと見守っているのは水色の髪の女性と金髪の青年。柔らかそうな栗色の髪の女の子は優しげな笑顔で月子を見つめていた。

「――――。――――。」

栗毛の女の子が月子に分からない言葉で話しかけ、優しく手を取って寝台から起き上がらせる。テントの床、剥き出しの地面の上には古ぼけた絨毯が敷かれており、荒い毛足が月子の足を擽る。その感触に月子はお気に入りのサンダルを履いていない事に気づいた。月子は考える。着ていたワンピースと一緒にこの人たちが預かってくれていないだろうか。外国の人だから通じないかも知れないが、どうしても気になった月子は意を決して聞いてみることにした。

「えと、わたしのワンピースとサンダルしってますか？」

「――――？…――――。」

やっぱりこの人たちは日本語が分からないらしい。どうにかして伝えようと、月子は自分の足を指差してもう一度声を上げる。

「わたしのはいてたやつです。しりませんか？」

周囲の人々は月子の言葉の意味を必死に考えているようで、顔を突き合わせて分からない言葉で話し合っている。

しばらくして、金髪の青年が何事かを宣言するとテントから飛び

出して行った。もしかしたら分かって貰えたのかも知れない。青年はすぐに戻ってきた。上気した顔で嬉しそうに、手に携えた何かを月子へ差し出す。

受け取ったそれは、茶色い革で出来た確りした作りのブーツだった。それも月子の足より大分大きい。やはり通じなかったのだと分かり、月子はちょっとがっかりした。それでもせっかく持ってきて貰ったのだからと思い、ぶかぶかのそれに足を突っ込む。夏にしては肌寒かったので、短い動物の毛で裏打ちされたそれは暖かかった。人から何かして貰ったらお礼する事。母の言葉に従い月子はぺこりとお辞儀をする。

不意に月子のお腹がきゅう、と可愛らしい音を立てて鳴った。朝ごはんを食べてきたばかりの筈だが、月子はどれほど川に流されていたのだろうか。外国に来てしまう位だから相当長い間流されていたのだろう、と月子は納得した。

そんな月子の様子を見て、周りの人々が笑い声を上げる。学校で先生に叱られている月子を見るときの同級生達のような、意地悪な笑い声では無い。月子を可愛がり、慈しむような声だった。それでも恥ずかしくって、月子はお腹を押さえてちょっと赤くなった顔をうつむける。

「――――。――！…――――。」

栗毛の少女が再び月子の手を取る。何事か月子に告げた後、奥の方に引っ込んでいた緑髪の少年に声を掛けた。そして月子の手を引いて優しく少年の前へと促す。男の子は、赤い顔をそっぽに向けて、手だけをぶっきらぼうに月子の前に差し出した。どうやら掴め、ということらしい。

知らない人にはついていっちゃダメよ、という母親の言葉が月子の脳裏に浮かぶ。ちっとも落ち着きのない月子を心配してか、あまり煩く言わない彼女の母が、それだけは口を酸っぱくして言っていた。でも、迷子になったら周りの優しそうな人に頼りなさいとも言っていた気がする。

うーん、と月子が思考の袋小路に嵌まっていると、焦れた少年が差し出した手を更に月子のほうに伸ばした。少年はちょっといじわるそうだけど、その草色の髪は暖かで優しい感じがする、と月子は思う。だから大丈夫なのだと頭の中の母と決着を付けて、月子は差し出された少年の手を握った。ぎゅっ、と握ったそれはやはりお日様のようにぽかぽかで気持ちよかった。

ぐい、とちょっと乱暴に少年が月子の手を引いた。少年がテントの入り口を指で示す。彼は月子を外に連れ出すつもりのようだ。少年に手を引かれ、月子はとことこと狭いテントを横切って行く。

少年が持ち上げてくれたテントの入り口を潜り抜け、月子は外に一歩足を踏み出した。さあっと穏やかな風が吹いて、優しく月子の頬を撫でる。草と水の爽やかな匂いを月子は感じた。同時に、焼けたお肉の香ばしい香りも。刺激されて月子のお腹が再び鳴き声を上げる。

少し離れた場所に、ゆらゆらと揺れる火の明かりとそれを囲む人々が見える。そこに少年が声を掛け、彼らの注目を集めた。人々はたちまち歓声を上げて、月子たちの方へ歩み寄って来る。彼らもテント内に居た人々に負けず劣らず、それぞれ個性的な髪色をしている。黒一色に慣れた月子からすると、とてもにぎやかだ。外見もまた同様に個性的で、老若男女様々である。中には化粧をした男の人も居て月子は驚いた。

「――――！――――…！」

集団から歩み出て月子に話しかけたのは赤褐色の髪をした大柄の男性だった。たてがみのような髪が下のほうで同じ色の顎鬚と繋がって顔の周りを囲っている。身長は月子の父親よりずっと大きい。見上げた顔が下から炎に照らされ、それが月子の目にはとても恐ろしく写る。昔話に出てくる赤鬼のようだ、と月子は思った。

思わず少年の後ろに隠れる月子。少年の影から恐る恐る赤鬼の様子を伺う。すると鬼は突然大笑し、月子を無理矢理引っ張り出してその頭をぐりぐり撫で回した。

「ひゃっ！」

食べられる、と月子は思わず身を硬くする。思わず目を瞑って数秒。鬼の牙が月子の首筋に突き立てられる、という事は無かった。月子がそろそろと目を開けると、鬼は間近にしゃがみこんで月子に笑いかけていた。その口から鋭い牙が飛び出ているという事はもちろん無く、思いの外優しそうなおじさんの顔がそこにはあった。

赤鬼あらためおじさんは月子に棒状の何かを手渡す。こんがりと焼けたお肉の刺さった鉄製の細い串だった。食べていいのだろうか、と月子が上目遣いで窺うとおじさんはにっと笑って首を縦に振った。お腹の空いていた月子はありがたくそれに噛り付く。もちろんおじさんにぺこんと頭を下げるのも忘れずに。

お肉は塩辛く筋張っていたが、噛むと口の中で肉汁がじわぁと広がり、空腹の月子にはとても美味しく感じられた。しばらく夢中になってそれを頬張っていた月子の肩を、急に傍らに居た少年がとん

とんと叩いた。

「“キリ”！――――“キリ”！――――――？」

少年は自らを指差ししきりに同じ言葉を繰り返している。そして今度は先程のおじさんを指差し『ブラン』という言葉を。少年は周りにいた人全員を次々に指差し、同様に一つの言葉を繰り返していった。それが名前を呼んでいるのだ、と月子は気付いた。月子は少年の真似をして彼を指差して言う。

「“きり”。お兄ちゃんはキリっておなまえなの？」

月子の言葉に少年―キリは満足そうに頷いてみせる。そして彼は最後に月子を指差して、問いかけるような口調で月子に話しかける。名前を訊いているのだ。月子にはすぐにそれが分かった。

「月子。わたしは月子っていうんだよ。」

だから月子は自らを指差し、そう教えてあげた。

「…トゥキコー？――――――。」

脇で見ていたお肉のおじさん―ブランと言うらしい、が怪訝そうな顔で呟く。

「ううん、ちがうよおじさん。つーきーこ。」

「トークゥイーコー？」

ダメだ、全然分かって貰えない、と月子は空を仰ぎ見る。その時

月子の目に夜空に浮かぶ大きな丸い月が写った。それでふと月子にいいアイディアが浮かんでくる。月子はブランの指をぐいぐいと引っ張って、天に仰ぐ月を示した。

「ほら、おじさん。見て。月子は月の子どもっていみだよ。」

「―？――――…。――――“ソーマ”！――――。」

促されて月を見上げたブランが納得したように大声で言った。

「“ソーマ”――――“ソーマ”！」

彼は月子と夜空の月を交互に指で示しては同じ言葉を繰り返し言った。『ソーマ』という言葉を。何度も何度も、月子に言い聞かせるように。

「そー…ま？」

月子が自分を指差してそう呟くと、ブランはうんうんと頷いて嬉しそうに、にかっと笑った。多分彼らの言葉で『月』という意味なのだろう。ツキコとは大分響きが違うが、彼らにはそちらの方が言いやすいようだ。それなら。

「そーま、うん分かった。わたしはそーま、だね。」

意味が同じならあだ名のようなものだろう。そう思って月子は口の中でソーマ、ソーマと呟いてみる。何故だかそれは不思議と、すんなり月子の心の中に入ってきた。

月子は迷子である。川に流されて分からない事だらけのこの地に

来てしまった。だから月子は親切そうなこの人々に頼ろうと思う。自分勝手かも知れないが、月子は家に帰りたかった。だから月子は家に帰れるまでは、この人たちの前ではソーマでいようと思った。そう思ったから月子は彼らに、出来るだけ丁寧に今日三度目のお辞儀をしてこう言った。

「ソーマです。よろしくおねがいします。」

月子、いやこの日ソーマと名づけられた少女。彼女はまだ知らなかった。流されてきたこの地が外国よりもずっと遠く隔てられた場所だという事を。彼女の求める我が家も、父も、母も、この世界には存在しないという事を。

五話「異界の迷子」（後書き）

三人称でこういう書き方はＮＧなのでしょうか。少し不安です。地の文が多くて読み難いですが、…ゆるして。
翻訳チート無しという縛りが仇になってるなぁ（ノД、）・゜・。
次回からは他の団員達の視点に戻ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2857z/

傭兵団へようこそ

2011年12月10日03時00分発行